



時の氏神

試し読み

そらのうてな〈前〉

天気とは、観測時における大気現象と雲に着目した大気の総合的な状態をいう。(『気象観測の手引き』気象庁)

さて幕臣のうち、二百石以上を得、お目見え以上を旗本といい、二百石以下、お目見え以下を御家人といった。いわゆる御直参である。一万石を越えると大名といい、幕府統治下ではあるが、幕臣ではなかった。とはいえ將軍にとってはひとしく臣下である、武家諸法度を則とし、参勤交代が義務づけられていた。

幕下に仕える二百石から九千九百石という旗本は三段階に分けられる。格、禄、職によって江戸城内での序列や差はあり、目付によりその行いも厳しく監視されていたりしたわけなのだが、内所が裕福であろうと、火の車だろうと町人にとつては武士で江戸屋敷でもあれば誰でもお武家様であり、役だの家格などがあつてもお武家様には変わりなかった。ところが、一万石にも満たないうえに、“御所”さまと呼ばれた大名があつた。天皇や貴人がおわす場所やすまう方々を表す“御

所”なる号は尊い、ちなみに公家にまつわる高家でも交代寄合といつたものでもない。清和源氏が祖の名家だから、である。

そもそも“將軍”さまこと征夷大將軍は、もとは征夷使といつて、大將軍、副將軍、軍監、軍曹などの役があつた。元正天皇の養老元〔七二七〕年、だじひのまひとあがたもり多治比真人あがたもり守を特節征夷將軍となされたのが始めである。(『官職要解』より抜粋)

幕府は軍幕を以て義を為す、という。政権は武家に移つた、將軍は幕府において軍国の庶政を執る。

徳川家康が朝廷から征夷大將軍を任じられ、慶長八年、江戸幕府はうまれた。木曾義仲、源頼朝、足利尊氏と継がれてはいたが、足利が絶えた後の戦国の世では、織田信長が雄図を描き、豊臣秀吉は“天下人”となり、政権を執れども征夷大將軍ではなかった。“將軍”さまは家康であり、豊臣秀吉も関白だった。そして家康は自身を足利の末裔としているが、戦国の世は誰もが源氏の子孫とも言える。そのためもあつてか家康は室町時代の故実を倣い、江戸幕府でも活かそうと『室町家式』をまとめさせている。何にしる周到な家康より徳川家が十五代までを繋いでいるわけだが、この將軍家でも隠居ののち“大御所”さまとは呼ばわれはしたが、在職中にはありえないことで、ましてやどんな大大名であろうと許されなかつた。

しかし、江戸幕府の客分とされ、“御所”の称号も許されただだ一つの藩は別だった。

足利喜連川左馬頭、喜連川藩である。

無石であり、参勤交代、その他の役務も免除、家格は将軍家と同格とされ、控えの間の序列も四品しほん（四位格）の十万石に劣らない大廊下や柳之間、扱いは別格中の別格だった。

石高五千石、祖は足利、秀吉によって再興され、家康が優遇した喜連川藩は下野国塩谷にある。

十

明け六つ（朝六時）に起き、朝餉と昼の用意をしてから素振りに和算、終えて朝餉を済ませてから神田の学問所へ。帰りは道場に行くと決まっている。そうでなければ調練所である。

「おはよう」

「おはようございます」

昌平黌は幕府の学問所である。官学とされている朱子学を学ぶところではあるが、生まれた土地しか知らぬ者にとっては通えば様々なことが養われる場でもあった。

「一色君、どうでしたか」

「小郷さん」

肌もつやつやしており、ふくよかな体躯の小郷は加賀の裕福な家に育っており、いつでも身ぎれいだった。幼少時は病弱で、姉と妹のつま弾く琴と算学だけが楽しみだったと言い、長じて学塾で食うように学んで今に至っているそうなの。武術はさっぱりと体躯が物語っているが、恐ろしいほど数に強い。三日に一度は征之助に和算の問題を渡してくれるから、解くのはもはや日課となっている。

「難問です」

正直に答えると小郷は笑う。これが叶福助にそっくりである。

「あの問題が解ければ天文の星に近付きます」

そして思わせぶりなことを続ける、小郷はのんびりしていそうな体格から侮られがちではあるが切れ者だ。しかもふくよかさを保たなければならぬ、とも常に言っていて団子屋に連れて行かれたりする。

そういうときにくつついてくるのが、蜂屋に秋山である。

秋山は眼鏡をかけ、ひよろりとした小普請組の子、蜂屋は若々しく、あどけなささえあるが妻子を郷里に残して寮で寝泊まりをしている。

「今日はよく晴れていますね、よく星が見えそうです」

征之助が返すと福助はいいや、と手を振る。

「長田くんが言うには雲がかかって夜は月すら見えないだろうと」

「そうとは思えませんが…」

確かに雲はあったが、これが広がっていくとは征之助も思わない。小郷はですねえ、と相づちを打ったがその腹は分からない。

「長田さんは」

続けようとしたところで背後から声がした。秋山と蜂屋である。

「ですから私は十六、蜂屋さんとは十も違う」

「一色くんといいいその若さで学問所など憎いが許そう。講義

しばいとびおたねゆかりのしたて 芝居鳶御種由縁仕立

境内には人が溢れていた。まるで日の本中の人が一気に繰り出してきたようだ。のろのろと進まない混み具合は年の市だからだ。だがそれでもこのお江戸の人の半分もいまい。参道の両脇には屋台店が出て、新年に必要な飾り物、お宮や、日用品や小間物から、飴や団子、餅などの食べ物などが並んで、ざわざわとうるさい人の声に負けじと売り声を上げて買い物客を呼び込もうと姦しい。

一方の栄江はこうした必要品はもう買ってしまっており、今日のはかつての主筋の祥月命日のお参りだ。

「いつものことだけれど、いまごろは混むわねえ」

奥向きに長く勤めて、賑やかな境内などほとんど知らない栄江にとっては、心浮き立つようだ。寺側の要望もあり年の市の前に法会を行うことが多かったから、厳粛な雰囲気の内しか知らなかった。

「あら」

すれ違う人も隣を歩く人ともぶつかり合う混雑の中、栄江は胸元に違和感を感じて目をやる。と、懐に男の手が入り込んでいた。この歳まで肌身を許したこともない。唯一代参で尋ねた寺の寺小姓と淡い恋慕を込めた視線のやり取りをしたくらい。だから、男から触れられた経験もない。とは言え、男と言えば殿しか見たことがないような武家の子女ではな

い。世間知らずも良いところの奥仕えの女たちとは違って多少はこなれているはずだ。慌てるようなことではない。けれども。これはどう見ても甚だ異な状況である。

艶っぽいどころか、これは犯罪が行われるまさにその瞬間だ。いわゆる「巾着切り」。この男は掏摸なのだ。栄江の財布を盗もうとしている。

常がない事態が頭に沁みて、思わず相手の顔を見た。若い男だ。それも驚いたことに男は栄江も、栄江の胸元すらも見ていなかった。一度も男に触れることを許したことの無い胸元へ無遠慮に手を差し入れておきながら、ぽかんと口を開け間抜け面でよそ見をしているのだ。なんなのだ、この男は。羞恥と怒りで栄江は思わずその若い男の頬を引っ叩いた。

「あいてエツ！」

ざわざわとした喧噪の中に男の悲鳴が上がる。周囲の目が一瞬にして栄江達に集まる。先ほどまで栄江の懐に手を入れていた男が、一体何が起こったのか全く判らないと言いたげな顔で栄江を見た。周囲に居た人ごみから「なんだエ？」
「サア。婆様に若い男が叩かれたらしいや」などの声が聞こえて全てを思い出したらしく、慌てながらも、ちつと舌打ちをして逃げようと身体を捻った。

「あ、これ」

相手に非があるのは明らかだ。が、やはり叩いてしまったことに罪悪感を感じた栄江は、逃げようとする男を追いかけてようと一歩足を踏み出す。と、そこへたまたま逃げようとした相手の足が引つかり、派手に転んでしまった。

「な……っ、なにしやがる！」

「あらあら、大丈夫ですか？」

顔から転んで鼻を擦りむいたらしい男は、片手で顔を押しさえながら、もう片方の手を聞くに堪えない悪態を吐きながら振り回す。その男が立ち上がるうとするのを、栄江は助けてやろうと咄嗟に手を出した。と、暴れる腕に触れた途端、その手が驚いて一層激しく動く。そのまま男の身体が後ろを向こうとしたその時。

「イッテテテテ……！」

と大声で悲鳴が上がった。見れば、男の手が今度は栄江の袂に入っていた。それもどうしてそうだったか判らないほどにこんがらがって、しかもその腕が勝手に立ち上がった男の背中側へ捻り上がっている。

「まあ、大変。さ、あちらで見せてごらんささい」

栄江は男を、人ごみから連れ出す。人が絶えず動いているあの中で、立ち止まっていると激流にも似た流れの中にある岩のように、人が後から後からぶつかってくるからだ。

「このババア……」

境内の片隅にある灯籠の所まで来ると、男が栄江に恨みがましい目で睨んでくる。

「これ、袂が切れてしまうわ。暴れないでおくれ」

だが、その言葉をどう取ったのか、更に男が暴れる。栄江がどうなっているのか探ろうと袂をうっかり上げると、より一層男の腕を捻り上げるような格好になってしまった。

「アイタタタタっ、あやまった！ あやまるから、勘弁して

くれ」

あっさりと男は降参した。

「オオ、了見してやろう。ですから、ちよつと大人しくしておいでなさい」

どうしたらそんな所から腕が入り込むのか、栄江の袂の後ろから腕が入り込み、襦袢の袖口から一旦腕が出て、更にそれを巻き込むように袂が捻り上がってしまった。

「で、あなた物盗りなの？」

男の腕をこれ以上捻り上げずに袖を外すにはどうすれば良いのか、痛めぬようと気を使いながら腕を外そうと試みる。

「ち……、違わあ」

栄江の問いかけにふくれっ面で吐き出す。その様が少年と言ってもいらいに子供じみていた。

「ならば、なぜ私の胸元に手を入れたの？」

端から言い逃れするのは想定内だ。栄江自身も町方に突き出そうなどは考えていない。ただ、この男がなぜよそ見をしていたのかが知りたい。

「なっ……、だっ……、誰が……っ！」

男はすっかり狼狽えて、助けを求めるように首を伸ばして周囲を見回す。が、人混みを外れたここへ助けに来てくれるような人もいない。

ふうむ、どうやら仲間がいるみたいね。

人出の多いこうした場所では、掏摸の一味が徒党を組んで稼ぐらしいと聞いたことがある。ひどい時は、数人で囲い込んで懐中の財布を盗み出すとか。

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)